

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

沙漠社会に見る適応と移動：アラビア半島の衣装と  
住居から考える＜共同研究：  
物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移  
動戦略に関する比較研究＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2020-10-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 縄田, 浩志 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00009591">https://doi.org/10.15021/00009591</a>

# 沙漠社会に見る適応と移動

## —アラビア半島の衣装と住居から考える

文 縄田 浩志

3年半の共同研究「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」の研究成果は、おもに(1) およそ半世紀前に記録・収集された民族誌的学術資料を活用して、衣食住を中心とした物質文化に関する文理協働(人文学、理学、工学、農学)の共同研究体制によって、アラビア半島における事例研究を格段に深化させたこと(縄田編 2019)、(2) その研究内容を企画展示「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年—『みられる私』より『みる私』」(2019年6月~9月)として迅速にアウトリーチしたこと、また、(3) 生活空間・物質文化・移動戦略の関係性とその変化について異なるオアシスにおいて比較検証し、人類の進化と適応、社会組織の可変性と開放性、物質加工の技術と担い手の交流という3つの側面に注目しつつ、沙漠社会の適応戦略と移動戦略に関して、いくつかの新たな視点や論点を獲得した点である。

注目した物質文化のうち、①ラクダと船に関わるモノと②飲料と食料に関わるモノについてはすでに本誌で概要を示したので、今回は③衣装と住居に関わるモノについて、サウジアラビアのワーディ・ファーティマ・オアシスの事例から考えていく。

### 衣服に見る性差と形態・種類の変化

本共同研究では、乾燥熱帯の高温沙漠における衣服を、とくに女性の下半身肌着の形態に注目して、人類の進化と適応の側面から分析した。暑い沙漠では、頭や体を広く覆える形の衣装が一般的である。地面からの照り返しによる体への熱の流入を防ぐのに適している。女性は男性よりも汗をかきにくく、かいた汗がながれおちる割合が男性よりも小さい。したがって、同じ量の汗をかいても女性は男性よりも気化熱によって熱をすてるのに使える汗の割合が多く、その結果、効率よく体温を下げるができる。また、暑くなると女性は太ももの皮下の血流を増やして、汗をかかなくても、伝導や輻射で熱をすてることができる。そのため、女性の肌着は太ももの部分がゆったりとしていて、この部分からの放熱がしやすくできていたのである(図 a、縄田編 2019: 30-33)。

ワーディ・ファーティマ・オアシスにおいても、男性と女性の衣服を比較すると、白を基調とした衣服は男性、黒や色柄を基調とした衣服は女性という点での差は明確であった。

こうした男女差は、エジプト、スーダン、アルジェリアなどのほかのオアシスの事例と共通している。放牧や耕作を中心に炎天下における作業に長時間従事する男性にとって、可視光線を反射する白地で頭部や頸部を覆うことが必須だからである。色合い以外の点では、男性用の衣服の形態や種類は概して変わっていないのに対して、女性用の衣服は外着・内着・肌着、頭・髪覆い、飾面ともに変化した点が多かった(図 a・b、縄田編 2019: 68-73)。

女性用の伝統的な晴れ着マハーリードは、生地の裁ち方と縫製を分析すると、一枚布を効率よく使い、裾はリサイクルしつつ、裏打ちしたキルトで棘から女性の足を守っていたが、現在は利用する人は少なくなった。一方、黒い外着アバーヤが主流となったのは1980年代から90年代初めであることを写真との対応により把握した。また、アバーヤの形は四角から袖・装飾がつく動きやすいものへと変化してきた(図 b、縄田編 2019: 74-91)。このように半世紀に及ぶ飾面と外着の種類や形態を丹念に追うと「黒のベールで顔まで覆い隠されている女性」という一面的なイメージはあてはまらず、色柄から黒が基調へと絶えず変化を伴ってきたことがわかった(縄田編 2019: 11)。

### 金製・銀製の装身具に見る社会的意義

女性にまつわる物質文化として次に注目されるのは、金製・銀製の装身具の社会的意義である。女性が身につける装身具は、芸術的な価値や歴史的・文化的意味に留まらず、危機的な状況に遭遇した時に市場で現金化して当座をしのぐための家族の財産という意味があったと考えられる。その代表格は、価値の安定性が高い貴金属の金であった。金の財産を身につけるものは、女性に限定され、かつ他者が気づきにくい肌着のボタンにしたり歯に埋め込んだりするなど財産保護を第一としていた(片倉 1979)。資源の稀少性・変動性・偏在性が高い自然環境に成立した沙漠社会は、いつでも安定した生活様式を模索してきた。そのためには開放性を伴った商業ネットワークに加わり、持ち運びが容易な貴金属という財産形態を利用しつつ、自然環境と社会環境の変化に柔軟に対応してきたと考えられる。

現在では、他者の目に触れる外側に華やかな金製の首飾り、腕輪、指輪をつけるのが好まれるようになった。一方、銀製の装身具は重たいこともあり、ほとんど利用されなくなるな

**縄田 浩志 (なわた ひろし)**

秋田大学大学院国際資源学研究所教授。専門は文化人類学、社会生態学、中東・アフリカ地域研究。主な著書に『砂漠誌—人間・動物・植物が水を分かち合う知恵』（共編著 東海大学出版部 2014年）、『ナツメヤシ』『マングローブ』『外来植物メスキート』『サンゴ礁』『ジュゴン』（いずれも共編著 臨川書店 2013-2014年）など。

ど、女性による財産保護の意味合いは薄れてきた（縄田編 2019: 114-115）。ただし、イスラームの護符や三日月ヒラルルをかたどったデザインは継承されており、現在の価格にして30万円ほどもする金製のネックレスが販売されている（図c）。このように物質文化に生活様式と資源利用の世代間ギャップが認められた。

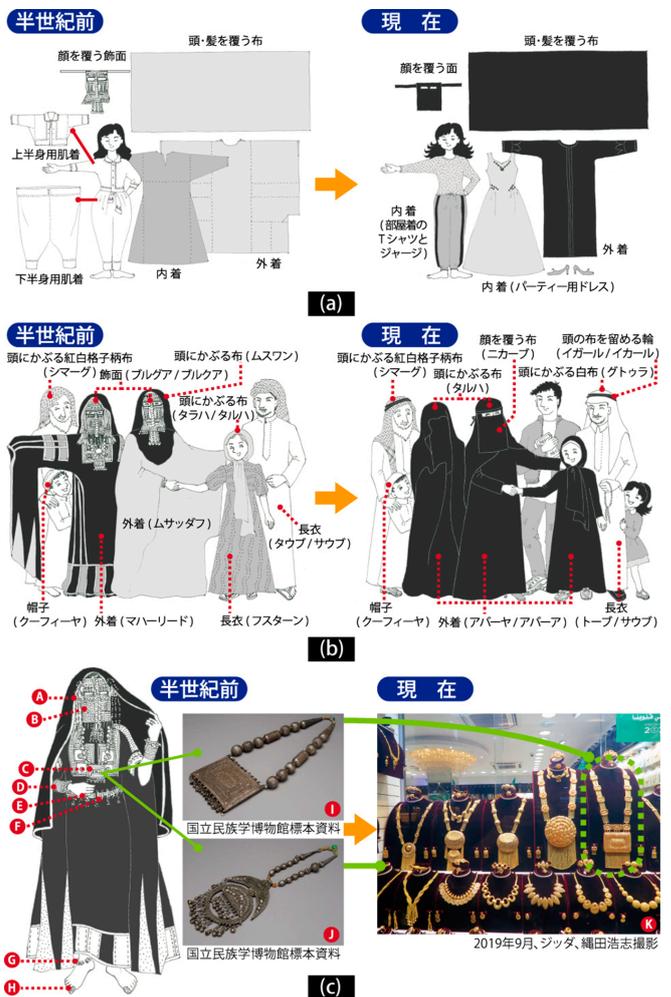
**飾面ブルグアに見る女性の主体的な選択**

女性用飾面ブルグアは、目の部分にだけ長方形の穴をあけ、中央部分は布を山型に折りあわせ出っ張らせる形状が、基本形として共通している。しかしそのほかのデザインや装飾は、民族集団または個人によって多種多様で個性にあふれている。装飾に用いられる平銀糸を織り込んだ紐組ティッルは半世紀前は、ある村の技術を持った女性たちだけがつくっており、マッカから商人が直接買いつけに来ていたという。しかし飾面の利用そのものの衰退に伴い、加工の技術は途絶えてしまった。ある女性は、半世紀前の20~30歳代の頃に、隣村の他民族に特徴的な平銀糸入りブレード紐組を使った飾面を気に入って大金で購入しファッションとして楽しんでいたという、デザインや装飾のみならず、購入・装着についても女性個人が自身の意思で選び取っていたことを聞き知った。色鮮やかな飾面をつける文化は現在では継承されていないため、写真資料と聞き取りを通じて当時の物質文化にまつわる社会状況が客観的な根拠にもとづいて歴史性とともにはじめて把握された（縄田編 2019: 96-99; 158-159）。

このように、物質加工の技術と交流という側面から、生活様式と物質文化の変化、また女性が主体的な選択をする社会的コンテキストを解明することができた。

**アラビア半島の衣装と住居に見る構造と機能の連続性**

一方、住居に関しては、紅海沿岸ではサンゴを建材とする複数階の建物が見られ、その窓・ペランダの部分には木製の格子細工の出窓ラウシャンがある。光と風を通して、室内の温度や湿度を調整するはたらきを持っており、ゆったりとさせることにより空気を通しやすく熱ものがしやすい衣服と同様のしくみと考えられる。さらに、内と外の空間を隔て、居住者のプライバシーを保つことにおいても、ある意味、女性が顔を覆う飾面ブルグアと似た役割を持っていたのである（縄



サウジアラビアのワーディ・ファーティマ・オアシスにおける男女の衣装の半世紀の変化：(a) 女性の外着、内着、肌着の変化；(b) 男女の衣装の形態・種類・名称の変化；(c) 女性用装身具の変化。A: 頭飾り、B: 飾面、C: 首飾り、D: 腕輪、E: 指輪、F: 腰飾り、G: 足輪、H: 足指輪、I: 護符をかたどった首飾り（標本資料番号 H0100442）、J: ヒラルルを含む幾何学模様の装飾がほどこされた首飾り（標本資料番号 H0100443）。図 a~c のスケッチは郡司みさお、遠藤仁作成（縄田編 2019: 73; 79; 103）。

田編 2019: 58-61)。

このように本共同研究では、民族誌資料を活かして半世紀に及ぶ沙漠社会の変化を追いながら、生活空間と物質文化をセットで考察することにより、その適応戦略と移動戦略の一端を明らかにした。

**引用文献**

片倉もとこ 1979『アラビア・ノート—アラブの原像を求めて』東京：NHK出版。  
 縄田浩志編 2019『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年—「みられる私」より「みる私」』東京：河出書房新社。